



河 戸 八 木 進

大正・昭和初期
竹田川の河戸

●坂の下河戸 坂の下河戸は橋北で一番下流の河戸で、十二段程の福井石尺六の立派な石段で出来ており、舟着場兼生活洗場も三尺板石が十二尺程並べられて、地域全体に利用されていた。三国から小荷物や川砂・砂利の荷揚げが頻繁に行われた。河戸の向う岸は浅瀬で、坂の下・古町区の馬洗場として利用され、馬河戸と呼んでいた。

●みそや河戸 生活河戸兼用の舟繋場でもあった。終戦後は三国新保からラッキョが荷揚げされ、加工用洗場として利用された。

●青辰河戸 整備された舟着場で、青辰石材店・岡部商店が主な利用者であった。石材や肥料が荷揚げされ、米が三国湊に積み出された。

●十日河戸 この両河戸は町の中央、市姫橋の下手に向き合って、片や六日区・新区、片や南金津中心街の舟着場で、上りの舟では雑貨・海産物・豆粕などが荷揚げされ、地域の商業に大きな役割りを果たしていた。

●水口河戸 この頃はまだ上新橋も浦安橋もなかった。桜井河戸からは米が積み込まれ、三段口河戸では砂利や川砂がおろされた。

た ず ね あ る 記

明治・大正は私どもにとって
ました。竹田川の河戸について
歩きましたが、その頃のことを
少なくなって、百年という年月の
みと感じました。そのお話の中

一つは、水口区から坂の下区にかけて北金津十ヶ所、更に上流にかけて稲越・矢地・清間・御郎丸・疋田など、各区毎に舟着場を兼ねた生活ということ。昔から三国湊への舟運が栄えての中を上り下りする舟が少なくなかったよう。金津地区にも舟主が居りました。水口区の桜代までは、三国湊へ下りは米、上りは豆粕などを持っておられ、又古町の馬場さんは「おもてで三国通いの川舟運送業を営んでおられたそう。坂の下区の清水さん親子も三国通い自営の水の多い時には舟べり五艘位まで荷を積んで、漕りしたそうですが、水量の少ない時に重荷をすについて動かず、一人は陸に上って綱をかついそう。

初代の善太郎さんの頃（昭和三四没八二才）運が繁盛したので、息子の吉太郎さん（昭和五成人すると、もう一そう舟を購入し、二隻で親うです。

善太郎さんが隠居した後、子息吉太郎さんと郎さん兄弟三人が舟運業を営み、米・川砂・砂物その他日用雑貨・食料品などを運んだを、は故人となられ、清さんは太平洋戦争で戦死さ郎さんの一番印象に残っているのは、砂や砂利だそう。藤づるで編んだ紅皿と呼ぶ籠に砂棒で担って、舟べりから堤防に渡した踏板を渡す。次に荷車でセメント工場や作業現場に運ぶ労働で苦勞が多かったそう。

その当時、自動車には米六十俵位積んだそう百俵程積み、三国まで運んで運賃は五円から十があつたそう。殊に春は、橋北の堤防にはその花の下を舟で通る時は楽しいものでしたが、今は板並木もなくなり、川岸の菜の花畑になって、のどかな田園風景は遠い夢になって昭和の中頃、竹田川の通い舟にもエンジンが

